

## IV まとめ

収納庫建設予定地における発掘調査の成果と問題点とをとりまとめておこう。

発掘区の東辺と南辺で検出した飛鳥時代の溝SD6160・SD6191の両溝の方位は、斑鳩宮跡の建物群や若草伽藍の方位とほぼ一致する。したがって、調査中はこれらの溝が斑鳩宮造営時に設けられたものかと考えたのであるが、南北溝SD6191の下層には古墳時代の溝があり、この流路が本来自然のものであることが明らかになった。このことは、飛鳥時代に至って古墳時代の溝SD6212に改修を加えて、この地域の主要排水路として整備された可能性を示すものである。斑鳩宮や若草伽藍の造営方位が真北と大きく異なる理由は、この地域の地形に合わせたものと考えられているが、今回検出した溝SD6191がSD6212を踏襲していることは、そうしたことを見せるものといえよう。

昭和56年度における防災工事に伴う発掘調査の際、第102・103トレンチで飛鳥時代の南北溝SD1001を検出した。その位置は律学院北側の西面築地際である。溝の東肩と、溝底を検出し、飛鳥時代の土器片を含む堆積土を確認している。西肩はこの直ぐ西側の南北方向の道路下か、その東側溝にあるものと思われる。SD1001は、聖徳会館建設に伴う昭和34年の発掘調査の際に検出された流路の上流部分と判断されたのであった。昭和34年の調査、そして防災工事に伴う昭和57年度の調査の際にも下流部においては明瞭な岸を検出するに至っていないため、SD1001の正確な方位を知る必要があり、今回の調査の際に西側にトレンチを設定した。ところが、SD1001の北延長部を検出することができなかった。SD1001は飛鳥時代の基幹排水路と考えており、『法隆寺発掘調査概報Ⅱ』においては、若草伽藍中枢域を区画する掘立柱柵SA3555・4850の検出とともに寺域の復原的考察をえた際には、SD1001を若草伽藍東辺を区切る溝と想定したのであった。したがって、SD1001がそれより北において後に削平されたものか、あるいはどこかで東折するものか、将来明らかにしなければならない大きな課題である。

収納庫建設予定地で検出した遺構は、ほとんどが近世に属するものである。意外に思えるのは、奈良時代から室町時代までの確実な遺構が検出されなかったことである。東院伽藍の造営が行われてしばらくの時を経た後、東大門と東院伽藍の間にも子院が次々と営まれる。それらの子院の裏手にあたるこの地域は、後世に遺構として残るほどの建物など営まれることがなかつたのだろうか。あるいは田畠として近世に至るまで耕作が続けられていたのであろうか。福園院や福生院の裏手については、少なくとも斑鳩宮の範囲に含まれる可能性が考えられる。このあたりのことと将来の課題として残ることになった。